

令和 7 年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育ステージ	早 期：黄熟期～成熟期（コシヒカリ） 早 植：穂ばらみ期～乳熟期 普通期：分けつ後期～穂ばらみ期
生育概況	早 期：「コシヒカリ」の出穂期は平年より 4 日程度早まった。出穂後の高温による白未熟粒や胴割粒の発生が懸念される。 早 植：出穂期は 2～5 日程度早まった。高温により葉色の低下や下葉の黄化、赤枯れ症状が多く見られる。 普通期：出穂期はやや早まる見込み。高温により麦跡ほ場では藻類、ガス湧き、赤枯れ症状が目立つ。一部移植遅れたほ場では茎数確保が遅れている。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、8 月は第 3 半旬までのデータ、参考資料参照）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
気 温（平年差）	+1.4℃	+0.1℃	+2.8℃	+3.1℃	+1.7℃	—	—
降 水 量（平年比）	114%	166%	82%	38%	54%	—	—
日照時間（平年比）	104%	86%	128%	151%	101%	—	—

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6 月 15 日以前の田植）

早期栽培「コシヒカリ」の生育ステージは、黄熟期～成熟期となっている。6 月以降の高温・多照の影響で生育が進み、出穂期は平年より 4 日程度早まった。出穂期以降 20 日間の平均気温が 27℃以上で経過しているため、白未熟粒、胴割粒の発生による外観品質の低下が懸念される。

早植栽培の生育ステージは、穂ばらみ期～乳熟期となっている。出穂期は地域や品種により差があるが、平年より 2～5 日程度早まった。一部では 7 日程度早まっている。高温・多照傾向で経過し生育は概ね順調だが、葉色の低下や下葉の枯れ、赤枯れ症状が多く見られる。

イ 普通期栽培（6 月 16 日以降の田植）

普通期栽培の生育ステージは分けつ後期～穂ばらみ期となっている。出穂期は平年よりやや早まることが見込まれる。移植後の植え痛みや除草剤の薬害により生育不良が見られ、特に薬害を受けたほ場では欠株が見られている。高温により麦跡ほ場での藻類の発生やガス湧き、赤枯れ症が目立っているが、中干しにより回復傾向。麦の収穫作業の長期化により移植が極端に遅かったほ場では、茎数確保が遅れていることから収量減が懸念される。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

病害虫は、斑点米カメムシ類が全体で多い。イネカメムシは東部地区の出穂が早いほ場から確認され、県内広域で見られ始めている。東部地区でイナゴ類がやや多く、中部および東部地区で紋枯病が多い。内稃褐変病は吾妻、利根沼田地区でやや多い。いもち病は一部で見られるが平年並。雑草では、中干し以降ノビエ、ホソバヒメミソハギ、ホタルイ、オモダカが目立つ。

(3) 作況ほ等の調査結果

ア 作況ほの調査結果（表 1 参照）

県平均の移植後 40 日の草丈は 63cm（過去平均比 106%）、茎数は 504 本/㎡（同 110%）であった。早期・早植の出穂期は 8 月 3 日（同 - 4 日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6 月 24 日移植）

「あさひの夢」の移植後 40 日の草丈は 77cm（過去 3 か年平均比 105%）、茎数は 493 本/㎡（同 101%）であった。幼穂形成始期は 8 月 4 日（同 - 1 日）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6 月 3 日移植）

「あさひの夢」の移植後 40 日の草丈は 63 cm（過去 10 ヶ年平均比 95%）、茎数は 491 本/㎡（同 80%）であった。幼穂形成始期は 7 月 26 日（同 - 1 日）であった。

表 1 水稻作況ほ調査結果（地域別・作期別）（ ）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月日	移植後 20 日調査		移植後 40 日調査		出穂期	
		草丈 cm	茎数 本/㎡	草丈 cm	茎数 本/㎡	カ所数	月日
県	6/5(-1)	31(101)	173(96)	63(106)	504(110)	8/15	8/3(-4)
中 部	6/15(0)	35(108)	214(109)	69(108)	530(122)	2/4	8/8(-5)
西 部	6/ 9(-1)	33(104)	142(85)	66(101)	472(107)	2/4	7/31(-4)
北 部	5/20(-1)	27(96)	182(102)	55(120)	518(103)	4/4	8/2(-4)
東 部	6/18(-1)	27(80)	104(62)	59(82)	472(114)	0/3	—
早期・早植	5/26(-2)	28(98)	176(91)	59(110)	509(106)	8/10	8/3(-4)
普 通 期	6/23(+1)	36(104)	169(108)	69(101)	497(118)	0/5	—

注 1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。

2) 移植期欄の()内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。

3) 8 月 15 日現在で調査時期となったほ場のみで、カ所数欄は「調査カ所／設置カ所数」を示す。

4) 早期・早植：6 月 15 日以前の田植。普通期：6 月 16 日以降の田植。

5) 桐生市は前年担当農家変更のため、館林市は本年担当農家変更のため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表 2）

各地域の作柄は、すべて「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表 2 地帯別作柄概況（ ）内は農畜産課・地域農業課

地区別	作柄	作 柄 概 況
中 部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	・早植栽培：穂揃期～乳熟期。出穂期は平年より 3～5 日程度早まった。高温の影響から、葉色の淡いほ場や下葉の黄化、赤枯れ症状が目立つ。 ・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。田植後の植え痛みや除草剤の薬害による生育不良が見られ、特に薬害を受けたほ場では欠株が目立つ。高温により特に麦跡では藻類やガス、赤枯れ症状が多い。麦収穫作業の長期化で一部では 7 月 20 日過ぎまで移植作業が行われており、茎数確保の遅れから収量減が懸念される。

西 部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	・早植栽培：穂ばらみ期～乳熟期。出穂期は平年より2～5日程度早まった。田植え後の植え傷みが散見された。 ・普通期栽培：分けつ後期～出穂期。出穂期は平年よりやや早まる見込み。麦収穫作業が平年より遅れ、田植時期はやや遅れたほ場があった。高温により特に麦跡では藻類やガス、赤枯れ症状が目立つ。藤岡では早植の一部ほ場でイネカメムシが昨年より早い時期に確認された。
北 部 (吾妻) (利根沼田)	並	・早植栽培：穂揃期～乳熟期。出穂期は吾妻で平年より5～7日程度早まり、利根沼田で2～4日程度早まった。利根沼田の高冷地では平年並み。一部地域で、出穂前後に水不足になったほ場があった。斑点米カメムシ（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）がやや多く、局所的に発生しているほ場が見られた。
東 部 (東部) (桐生) (館林)	並	・早期栽培：黄熟期～成熟期。コシヒカリの出穂期は平年より4日程度早まった。出穂後の高温による白未熟粒、胴割粒の発生が懸念される。 ・早植栽培：減数分裂期～乳熟期。出穂期は平年より2～3日程度早まった。高温により下葉の黄化や赤枯れ症状が多い。東部では一部で内穎褐変病、紋枯病が見られる。 ・普通期栽培：減数分裂期～穂ばらみ期。出穂期はやや早まる見込み。高温により下葉の黄化や赤枯れ症状が多いが回復傾向。斑点米カメムシ類が平年より多い。

3 技術対策

(1) 共通

ア 気象庁発表による長期予報では、向こう1か月の気温も高温となることが予想されている。高温による品質への影響が懸念されることから、適正な水管理や適期収穫等の基本技術を徹底し、被害の軽減を図る。

イ 生育の前進を見据え、計画的な作業とその準備に努め、荷受け施設においては水稻の生育に応じた稼働計画を設定する。

ウ 農薬散布については生育ステージに応じた適期散布と適正使用を心がけ、使用履歴の記帳を徹底する。

エ 斑点米カメムシ類を本田に寄せ付けないために、出穂期の前後各3週間程度はイネ科一年生雑草を継続して出穂させない畦畔管理を行う。そのため、出穂期の2週間前と出穂期頃（イネ科雑草発生前）に除草を行う。ただし、やむを得ず1回しか行えない場合は従来と同様に出穂2週間前までに除草作業を行い、以降は作業を控える。本田で薬剤（液剤）による防除をする場合は、穂揃期とその1週間～10日後に行う。イネカメムシについては、出穂期とその1週間～10日後に行う。

オ いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病が発生したほ場の粃は翌年の種もみとして利用しない。

(2) 早期・早植栽培

ア 乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、高温が予想される場合は飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

ウ 出穂後30日以降を目安に落水し、その後は必要に応じて走水を与える。

エ 高温日が連続すると登熟期間が短縮しやすいことに留意する。また、白未熟粒や胴割粒の発生が懸念されることから、成熟状況を確認して適期収穫を徹底する。

オ 急速乾燥や過乾燥は胴割粒の発生を助長するため、乾燥作業には十分留意し、毎時乾減率は0.8%以下で乾燥を行う。

(3) 普通期栽培

ア 穂ばらみ期～出穂期は湛水、乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、出穂後に高温となる場合は、飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 葉色が低下しているほ場では、穂肥により高温障害（白未熟粒・胴割米）の軽減を図る。

ウ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

エ 病虫害の発生状況、発生予察情報を踏まえ、効果的防除を心がける。

《参考資料》

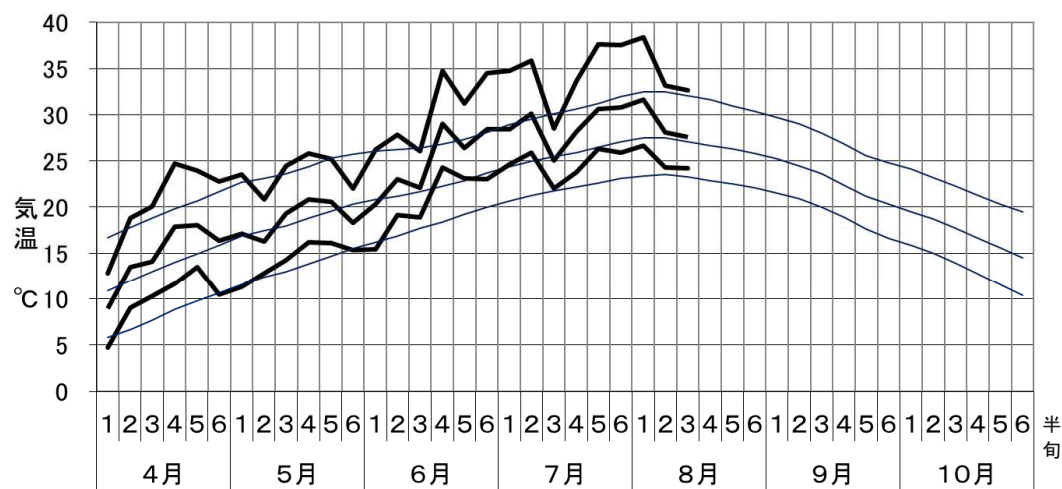


図1 気温

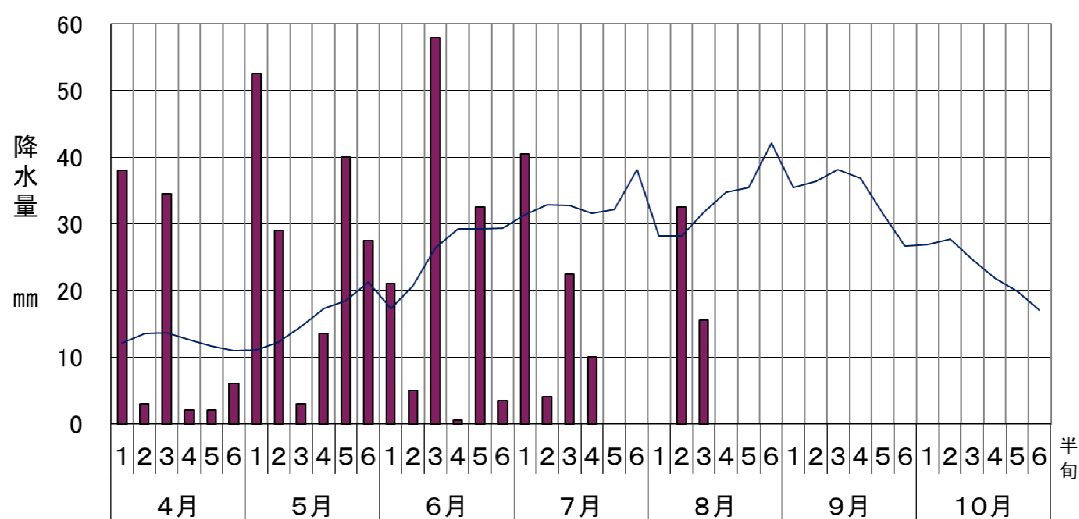


図2 降水量

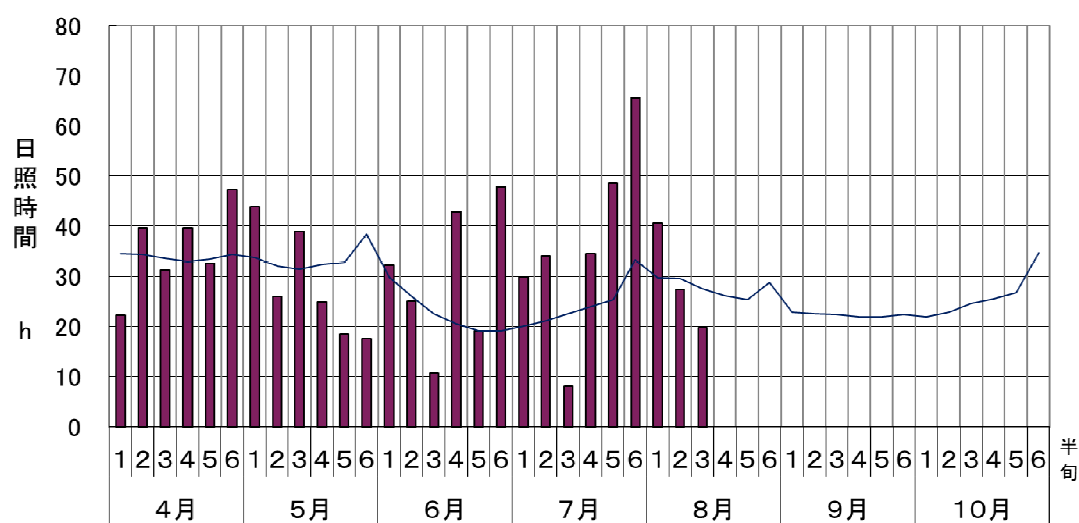


図3 日照時間